

# 人形浄瑠璃文楽九月公演

あかたにけいこ  
赤谷慶子

文楽を継承する活動重ねらるる友人より隣家の従姉「観覧券」を入手したりき。たまさか三連休にて都合つきしかば誘ひに應じ、国立小劇場へと赴きけり。十數年前昔の勤務先の先輩より観覧券臺り受け、親友と観覽せし事ありき。題目は失念すれど閻魔王の裁き事ならざりしや。あたかも魂人形に乗り移りたるかのごとき舞臺を間近にみて、感じ入るところありし記憶あり。

今回の公演はむすめかげきよしま嬢景清八嶋日記「はなびしや花菱屋の段」と「ひうがしま日向嶋の段」なりき。席は最前列より五番目にて語りと三味線の脇なりしかば、かなりの迫力なりき。全身全靈にて腹の底より聲を張り上げ、一見して心筋梗塞起さずんばあらずやと心配に思ふほど力の入りたる語りにて凄まじきの一言に盡く。平家の侍大將あくしちひやうあかきよ悪七兵衛景清の娘「いとたき絲瀧」は盲目の父親一生飢ゑざるやうお金を届くるため、自ら遊女になり、お金届けたしといふ話しなり。さてそのお金届くるは日向嶋の段の場面なり。景清は東大寺の大佛供養に出席する源頼朝を討たんとし、捕へられ頼朝の情けを受くるが、恨みの念抑へきれず自ら兩眼をくり抜きて放浪のはて、日向におきて貧しく暮らしたりき。そこへ娘現れ、感情のぶつけ合ひあり、景清は素直に喜べず、絲瀧を歸しぬ。船出發せし後、絲瀧身賣りをしてまでお金を作りしを知り、愕然として泣き叫ぶ。その感情の高ぶり、語りも人形も迫力一杯の舞臺になりたり。結末は降参を進言する二人の目付の言葉と娘の孝心に心打たれ、上洛の船に乗るところにて終はる。舞臺の左右袖には、語り映像にて映し出さる。また、プログラムには床本集真ん中にはめ込みてあり、これなくば、話はチンプンカンプンなり。前回文楽観覽せし時は未だ文語文に接したる事なけれど、今回は些かなりと文語を學びたるによりて、読みつつ意味理解するを得たり。

浄瑠璃も能・歌舞伎と同様、日本の傳統藝能として是非とも継承すべき文化財にて、次世代に繋げんが爲に今後も然るべき努力を要すと思ひき。

(令和元年九月二十日受附)

